



子どものための災害支援

NPO法人いぶり自然学校

子どものための災害支援
NPO法人いぶり自然学校

発行日 令和2年3月
発行人 上田 融
発行元 NPO法人いぶり自然学校
<http://iburi-nature.com/>

非売品です。本誌掲載の文章・図版等の無断複写・転写を禁じます

はじめに

真夜中、突然ゆっさゆっさと家が揺れ始め、一気に目が覚めました。すごく心臓がドキドキしているのに、家族にそれを悟られるのがなんか気恥ずかしくて、平静を装いながらもとにかくテレビをつけて、津波がこないかどうかを確認したのが、3時30分ぐらいでしたでしょうか。ああ、今回の地震は津波はないんだな、うちは海が近いから、次はあっちに逃げなきゃね、なんて話していたら、停電。真っ暗闇です。

スマホの充電の残りを気にしながら、とりあえず家族やスタッフの安否が確認できた頃に、なんだか家のまわりがザワザワとし始めました。とにかくテレビが映らないので、何がどうなっているのかがよく分からないし、停電はずっと続いているし、信号もつかないから警官が交差点に立ってるし、などと、どうも普通の地震じゃないなと思っていただころに、SNSを通して「被災した子ども園の片付けを手伝って欲しい」という連絡が入りました。

とにかくこれはやばい事になった、という判断をし、大工道具を車に乗せて早来に向かいました。その頃になると、もうスマホどころかインターネットにも繋げることができず、情報がゼロになった状態です。でも、早来に向かう間の車の中からみた光景を見るだけで、事の大きさが十分に伝わってきました。そこから、言ってみれば今日まで、ぼく達の生活や活動様式は一気に変わりました。

実は、その頃具体的に何をやっていたのかは、正直あまり記憶がないというか、記憶が飛んでしまっている状態です。とにかくその時その場の雰囲気を知り、次に何が必要か、そのあと何が生まれるのかを想像しながら、五感をフルに動かして事に当たっていたな、ということだけ、頭ではなく体が覚えている感じです。

しかし、細かい事はほとんど記憶にないけど、本当に多くの方にお手伝いいただいた、支援していただいた、という事だけは鮮やかに覚えており、すこし時間が取れるようになったら、しっかりとお礼とご報告に上がらなければ、とずっと思い続けていました。そこで、あの大きな地震の後、皆様のご支援を受けて僕たちが行った事、そしてこのあと何につなげていくのか、という事を報告書という形にまとめ、この一連の活動を記録しておきたいと思います。

胆振東部地震のあと、NPO法人いぶり自然学校が進めたSVC(スマートボランティアセンター)という活動に、実に多くの方々に有形無形の支援を賜りました。そのおかげで、スタッフ一同無事に活動をすすめることができました。この場をお借りして、あらためまして、深く感謝申し上げます。この報告書にまとめたことが、今後の有事の際にひとつでも役立ち、特に子どもや保護者の方々の心の支えとなればと願っております。

NPO法人いぶり自然学校 代表 上田 融

はじめに

初期初動 はやきた子ども園

一緒に動いた人 井上 亜紀代さん(苫小牧市在住)

SVC設置 早来ー厚真ー穂別ールーラル

一緒に動いた人 巽 創さん(厚真町在住)

厚真 ハッピースターランド

繋がった人 斎藤 烈さん(厚真町在住)

FKアドバンス

早来 北進の森プレーパーク

繋がった人 小瀧 綾さん(安平町在住)

厚真冬のプレーパーク

繋がった人 宮下 桂さん(厚真町在住)

ヒトハキャンプ

繋がった人 鐘ヶ江 歩さん(安平町在住)

冬・春ヒトハキャンプから見えてきたもの

支援という経験を活かす

一緒に動いた人 鈴木 奈津美さん(東京都在住)

報道と収支報告

Contents

※『一緒に動いた人』『繋がった人』では、「この活動に関わったきっかけ」「実際に活動に関わって感じたこと」「ふりかえって思ふこと」をお寄せいただきました。

北海道胆振東部地震

2018年

9月

10月

11月

12月

2019年

1月

2月

3月

6日地震発生

初期初動 はやきた子ども園

SVC設置 早来ー厚真ー穂別ールーラル

厚真 ハッピースターランド

FKアドバンス

早来 北進の森プレーパーク

冬のヒトハキャンプ

厚真冬のプレーパーク

春のヒトハキャンプ

初期初動 はやきた子ども園

SVC設置 早来ー厚真ー穂別ールーラル

厚真 ハッピースターランド

FKアドバンス

早来 北進の森プレーパーク

冬のヒトハキャンプ

厚真冬のプレーパーク

春のヒトハキャンプ

初期初動 はやきた子ども園

自分たちは大丈夫 だから、行こう。

ぼくたちの住む町、苫小牧市も大きな揺れと停電に見舞われ、不安な夜明けを迎えることとなった。まずはそれぞれの家族の安否を確認し、概ね大丈夫だということとなったので、事務所の近所に住んでいるスタッフが集まり、まずはほっと胸をなでおろしつつ、各拠点の森、苫東・和みの森の状況確認に走り、とりあえず自分たちの責任範囲は問題ないことを確認した。それが、午前中の動きである。

そして午後、充電残量の減り具合を気にしながらFace bookを開き、ぼくたちが関係する人々の状況を確認しようと思ったのだが、いまいちその状況が更新されない。どうやらそんな暇がないほど、みんな大変なんじゃないか、と心がざわめき始めたところに、「はやきた子ども園」園長である井内聖さんの「園舎・園庭が大変なことになっている。手伝いを募集している」という投稿を見た。

それを見て10分間じっと考え、「行こう」と決めたのが、その日の13時頃。ハイエースにありったけの工具と発電機を載せ、スタッフとともに子ども園に向かった。出迎えた井内園長。知っている人も多いと思うが、彼は説明である。そんな彼であったも、さすがに動揺している感じはあった。しかし、にこやかに迎えてくれ

SVC設置

早来ー厚真ー穂別ールーラル

ボランティアは、どこにいればいいんだ？



神戸での大震災以来、日本各地で起きた災害は、ボランティアによる支援活動の質と量を高めたのだと思う。特に東日本大震災で発達したのはSNSだ、という話は本当だと思った。現地地活動をしていると、SNSを通して現地の状況を把握した上で、日本中から支援活動を支援したいと申し出る人たちがぞくぞく集まり始めた。その活動がSNSで拡散され、さらに人が集まってくる、という現象が生まれた。しかし、そこにちょっとした経験値の差が見られ始めた。い

つけた人たちは、勢いで来たものの、道具がなかったり、そこに滞在することができなかったりと、居場所を確保できない雰囲気があった。また、陣頭指揮をとる地元役場や社会福祉協議会は、流石にボランティアで集まる方々にまで受け入れ態勢を整える余裕がないし、使える施設や建屋はほぼ避難所や資材置き場として使われるため、貸し出すこともできない。しかも、季節は秋。朝晩はかなり冷え込むようになり、特に本州から来た方には辛い時期を迎えつつある。そこで、当方の所有するテントや簡単な調理器具、灯油ストーブ、あるいはネットワークの中にあるキャンピング

グカーを設置し、ボランティアで集まった方が少しでもそのハードワークの疲れを取り除けるようなSVCを設置した。結果、SVCにボランティアが集まることで情報共有が促進し、次にやるべき行動や、いわゆる「引き」を議論することができ、不要とあらばすぐに撤収する、という旬通な動きを展開することができた。これは、東日本大震災において、空き家を借りたボランティア拠点づくりをした際の「契約」「引越」の大変さから学んだノウハウであり、そこはうまく機能したと考えている。そして何より、はやきた子ども園では、家に帰らずに不眠不休で動き回っ

Table with 2 columns: Date and Activity. It lists various volunteer activities and events from September 6th to 10th, including disaster relief, food distribution, and facility setup.



一緒に動いた人 井上 亜紀代さん (苫小牧市在住)
活動に参加するきっかけは東日本大震災の時の思いから繋がっていました。震災直後はもちろん、その後の被災地支援の人手を求める声に力になりたいと強く感じましたが、当時幼稚園児のいる自分には微々たる募金をすることしか出来ませんでした。そんな思いがずっとあった中、今回の地震に見舞われ、いつもお世話になっている大切な仲間や大好きな人が住む町が大変なことになっている。今回こそ何か少しでも助けや励みになることができないだろうか、しかし、やみくもに駆けつけることは現地の迷惑になることもある、と思っていました。具体的な手伝い募集を子ども園でしている、との声。小さな子どもたちやその家族をケアをする保育士さんの助けになりたい。しかし娘たちがまだ余震や停電で自宅待機だったため小学生の子ども

一緒に動いた人 巽 創さん (厚真町在住)
私は苫小牧市に居住しており、また幸いなことにフリーランスであったため、震災翌日から支援に取り掛かることができました。しかしながら日帰りで通える距離とはいえず、余震も続く中で毎日ガソリンを使って往復することに不安がありました。そこにいぶり自然学校が震災支援の一手としてSVCを設置するという話を聞きました。ボランティアが作るボランティアのための拠点ということ、現地住民にお世話にならずに気兼ねなく利用できる場所だと、安心しました。単純に、寝具など生活道具が一人暮らしで普段使っているものより良かったので、よく眠れました。また夜にはそれぞれ場所で活動していたボランティアが集まるので、被災状況や支援活動を共有することができ、しっかりと明日へ備えることができました。SVCには大小様々なキャンプ道具を使っていますが、道具の価格が高かったり、使い方の知識が必要なものもあったり、不特定多数のボランティアが利用するには多少とはいえずハードルがあったのではと感じました。キャンプに慣れたSVCの管理担当者や毎日滞在して初めての利用者

初期初動 はやきた子ども園

早来 北進の森プレーパーク

SVC設置 早来一厚真一穂別一ルーラル

厚真 ハッピースターランド

FKアドバンス

冬のヒトハキャンプ

厚真冬のプレーパーク

春のヒトハキャンプ

我がいぶり自然学校は、直接的な被害はなかっただけに、強い使命感を持ってスピードを上げ、瞬時の判断で活動を展開していた。それがその場にいるNPOの役目だと認識しているからだ。取るものもとりあえず、持ち出せるものはほとんど持ち出し、それにかかる費用もとりあえず立て替え払いをして、あてはないけど、なん



とかする」とにかく今は目の前のことをという思いで突っ走っていた。その一方、今回の震災の影響で、年度当初より計画していた様々な事業が中止、あるいは延期、再検討という判断をせざるを得ず、立て替え金がかさみ、みるみる残高が減っていく通帳を眺めながら、苦しい判断をしな

これは、秋口から春休みシーズンまでプログラムで展開するという大きなプロジェクトとなり、ふくしまキッズ事務局はもちろん、受け入れ側も細かな調整を続けることとなった。結果としては、

受け入れる側、そして支援する側にとつても有意義な時間となり、特に現地ではなかなか集めきれない「プレーリーダー」の役割を担ってくれたことは、本当に助かったことである。

きかが今後の課題であるといえよう。

FKアドバンス

波紋のように伝わり、届く支援を検証する

そこを救ってくれたのが、個人や組織で集められた募金、各種ファンドである。行動を始めてから1ヶ月経ったあたりから、まずは個人の募金が始まり、次第に様々な組織や団体が「職場で集めました」「学校でバザーをやった集めました」というお金が振り込まれ、さらに大きな支援団体が募金を検討しています、という連絡を送ってくれたり、まさに波紋のように広がっていった。

一方、地域としては、いわゆる支援フェースが刻一刻と変わり、今はこれが必要、「もうそれは必要な」という判断が一瞬でなされるスピードで動いていた。大きな組織がじっくり時間をかけて合意を取り、準備万端で活動にやってきましたら、「もうそれ、間に合っています」的な雰囲気の流れが止まらなくなり、現地ニーズと提供するものがマッチしない場面が見受けられたことは否定できない。波紋のように、同心円のように広がっていく支援の輪。それはとてもありがたく、大切なものであると実感すると同時に、どうしても生じてしまうその「ずれ」をいかにコーディネートするべ



ぼくたちが近くに拠点を持つ者として初期初動、あるいはSVC設置に動いている時、ぼくたちと同業者として横の関係にある方々(ここでは「仲間」をそう表現させていただく)も、それらの関係や技術を使って支援活動を展開していた。



この活動はいいことはかりではありませんでした。川遊びで汚れたまま避難所に戻ってしまったり、避難所がない子どもたちもこの場へ来て、避難所のトイレを借りたりしたりと、避難所にいる方々が困った一面もありました。今思うと、配慮がなかったなと反省しています。ただ、あの時はそこまで考えることができなかったのも事実です。この

この活動で、たくさんの人と出会いました。あの頃は人と人とのつながりが生み出した場だったと心から思っています。あの非日常だった場所を、これからの厚真の日常にするために何かできるか...あの場で学んだこと、あの場で感じたこと、あの場でつながった人と一緒に、これからも模索していきたいと思っています。みんなの厚真での暮らしが豊かになることを願って...

子どもはどこのいたらいいんだ? 厚真 ハッピースターランド

SVC機能との連動、そしてお預かりした募金を活用してその運営を支える役割を担うこととした。少しでも「子どもに何かしてあげたい」と手弁当で集ってこれる仲間たちの活動を促進できるような役割を担った。

この活動は徐々に運営体制を変えながらも継続的に展開されることとなり、この活動がきっかけで色々な仕組みや、例えば関わったボランティア個人の人生観を前向きに変容させるきっかけとなったようである。屋外で子どもたちを遊ばせるという手法の多様な効果や意義をぼくたち自身も再認識することができた。

最初やはり、「その時、その瞬間にならなければならない」とか考えてませんでしたね。わたしは、当時厚真町の嘱託職員という立場だったので、正規職員ではなく、避難所勤務がなかったんです。ある意味で自由に動ける存在だったのが大きかったなと思います。もともと、自分ひとりではなにかをやろうとは思っていませんでした。一方的に「困っているのを助けてください」ではなく、自分の思い、子どもたちの思い、保護者、地域の方の思い、そして、周りで支援してくれている人の思いを大切にしたいと思って活動していました。



初期初動 はやきた子ども園

SVC設置 早来一厚真一穂別一ルーラル

厚真 ハッピースターランド

FKアドバンス

早来 北進の森プレーパーク

冬のヒトハキャンプ

厚真冬のプレーパーク

春のヒトハキャンプ

早来

北進の森プレーパーク

まさに「コミ森」。森を通じて、新たな関係を生み出す

はやきた子ども園は「暮ら」をキーワードとした子ども園である。自分たちで野菜を育てたり、井戸で水をとったり、馬を飼育するなど、日頃からの実直な暮らしを保育の基本に据えた活動を展開している、というのが特徴である。

その一つとして、園としても山林を所有し、森林の手入れや遊びから林産物を得て、それを活用する活動を展開している。というが、それをこれから積極的に展開しようとしていた矢先に、大きな地震が起きた。そして、その山林も地滑りを起こして大きなダメージを受けてしまった。まるで月面のクレーターのように火山灰がむき出しになり、鬱蒼とした緑で覆われていたべき場所にぽっかりと青空が見えるようになってしまった地滑り斜面。

ここが木材生産を目的とした山林であれば、公的資金を投入して修復する手立ても考えられただろうが、ここはそうではない。子どもが遊ぶための森、つまりは「雑木林」であるだけに、支援の手が届かない状況である。それだけに、最初にこの地滑り斜面を案内された時は、あまりにも大きなダメージにあっけにとられた。



しかし園長とアイデア出しをする中で、子ども園の大切にしている「暮らし」というコンセプトに立ち戻った時、それをむしろ前向きに捉えるイメージが湧いてきた。「壊したのも自然だったけど、治すのも自然」。そこに、人間が少し手を加える、という里山の手法を子ども達、あるいはその保護者や関係者と楽しみながら進める、という「コミ森的アプローチ」は、これまでいぶり自然学校が進めてきた得意分野でもある。

しかし、それはそう簡単に進められるものではないことも知っているし、ましてやばくらに

厚真 冬のプレーパーク

つながりの再確認、そして次のステージに向けて

厚真で展開していたハッピースターランドについては、厚真町教育委員会主催での活動へと変容し、年末に屋内での活動を実施して一区切りとなった。

ハッピースターランドという活動が起こした化学反応はとてもの大きかったと認識している。地域内にある子育て団体が、地震で被災したにも関わらず活動の提供側にまわり、創造的なプログラムを展開したり、NPO法人 ezorock が派遣するボランティアと地域に住む方との有機的なつながりが生まれたりしている。確かにそのきっかけは必ずしも幸せなものではなかったものの、まさに出会ったご縁を大切に次へと展開していく底力を実感できる取り組みが多く生まれたと感じている。

その中で、もともと厚真町として取り組む計画があったプレーパークについて、町内において関係者と「もう一步深くそのイメージを共有したい」と思い、ここまで生まれてきたつながりを再確認し、次に展開していくきっかけとすべく、雪深い冬季にプレーパークを実施した。確かに秋口にはよくハピスタには行っただけ、寒くなると、雪降つて、それともう終わっ



裁量がある山林ではなく、かつこれから冬を迎える時期でもある。しかも、そもそも「プレーパーク」とはなんだったのか肌感覚も感じられた。そこで、即行動・即整備というよりは、今年度は、まずはその機運を作る、あるいはそのイメージを共有するという目標を立て、地滑り斜面の整備やプレーパークのデザインを明確にしていくこととなった。

具体的には、真冬ではあるが毎週末プレーパークを実施。町内外の子どもや保護者、関係者にその可能性を体感してもらおう。そこに少しづつ倒木の除去や搬出、薪割りなどの作業を組み込み、その有用性や面白さ、子どもでも素人でも貢献できる、というシーンを体感してもらい、そこにスタッフやボランティアの派遣と活動提供した。むしろ冬だからこそできる活動や可能性を創出することができたように思う。

一方、十分な協議をして、しっかりとした合意のもとに活動展開を始めたつもりではあるが、やはり「これから始めようとしている主体者」と「これまであちこちでやってきた支援者」の間では、議論だけでは十分な現場イメージ共有を構築することができず、主体者から見れば若干のズレがあったかもしれない。少しでも現場を共にする時間を積み上げていくことが重要であるを再認識したと共に、そこだけに逃げることなく、その協議の中でしっかりとイメージ共有ができる文言の精査やブレゼン能力が必要だと感じる。

少々おつかひつくり活動を始めたところ、予想以上に多くの人が集い、寒い中終日プレーパークを楽しむ、という結果となった。

グリーンシーズンとは違い、寒さ対策としてスマートモテューロを設置し、最低限の採暖ができるシェルターを用意し、屋外ではなるべくたくさんの火を起こしつつ、雪遊びやおやつ作り、あるいはお風呂コハンを焚き火で作って食べる、などを楽しんだ。

予想外であったのは、近隣のお年寄りがたくさん集まったことである。秋口のハッピースターランド実施から、お正月を挟んでしばらく開催の間が空いてしまっていたが、その間にこの活動の趣旨や面白さがじんわりと伝わっていたのかもしれない。子どもの活動が中心にあつてそこから地域の活動へ広がっていくというまさに社会教育の真骨頂を見たように感じている。

その後、この一連の活動が、厚真の社会教育事業やプレーパーク、学校、町有林の利活用、何がどう具体的に反映されていったのかは、ぼくの立場では追跡できていないが、この一連の活動がきっかけになって、それが反面教師的な評価であったとしても、何かを推進する一助となつてくれることを願うばかりである。



繋がった人 小瀧 綾さん (安平町在住)

プレーパークは震災前から安平町で「やってみよう」のひとりの活動だったこともあり、震災後の崩れた森の状況からのスタートということにはちょっと戸惑いもありました。しかし、実際に震災により子どもたちの遊び場が失われていたからこそ、この活動を推進していくことの大事さは肌身で感じていました。そして、実際のところ、9月6日の震災、災害ボランティアセンターの活動に追われる中、11月10日にプレーパークのキックオフイベントを行うことになりました。

準備期間なども特になく、あれこれプレーパークを考へて行うより逆にもう開き直って「一、やってみるか!!」という気持ちになりました。子ども達の遊びと森の整備(大人の活動が共存していた)ということが非常に嬉しく価値のあるものだと思いましたが、例えは、薪づくりひとつをとってもそうです。大人がチェーンソーで伐倒し、馬が運び出す。運び出した木を玉切りにする。その玉切りをした木を子どもたちが薪割り機で遊びながら薪づくりをする。できた薪で火を起こす。こういった一連の作業と遊びの中に大人と子どもが共に役割を持つて過ごせる。楽しめるといことは新たな可能性が生まれた気さえます。

2月分化するような関係を築くことが多かったこともあり、とてもこれに違和感を持ってきていました。できれば、スタッフと参加者の垣根を取っ払った関係性で運営したい。…なので、最初「スタッフである姿を参加者に明確にする」というような進行になりかけた時に極力その要素を減らしたいと思ったことくらいです。

繋がった人 宮下 桂さん (厚真町在住)

一番は感謝です。いま思えば、先が読めずどうなるかわからない状況の中で、私も不安だったんだと思います。そんな中「宮下さん何でも言ってくれば、指示通りに動きますよ」とかけてくれた言葉や見る見るうちに、本当に素敵な子ども達の居場所ができあがっていく状況に、なんて心強いんだ!と涙が溢れそうになったのを覚えています。

これがよかつたと思つたのは、新たなつながりが毎日のようにできたこととです。単純に「子どもたちのために」という思いで、自分にできることを持つて厚真に来てくださった皆さんが次々に自分の力を発揮してくれている。ハッピースターランドの物理的な環境もさることながら、いろんなものを受け入れられるハピスタの緩やかさやプラットフォームとしての懐の深さみたいなところはすごく良い

初期初動 はやきた子ども園

SVC設置 早来-厚真-穂別-ルーラル

厚真 ハッピースターランド

FKアドバンス

早来 北進の森プレーパーク

冬のヒトハキャンプ

厚真冬のプレーパーク

春のヒトハキャンプ

ヒトハキャンプ

宿泊型プレーパーク、という挑戦

いぶり自然学校がこれまでやってきた「子どもの自然体活動」と、災害に対する支援活動を掛け合わせた結果、プレーパークという手法に行き着き、発災以降回数や程度の差はあれど、色々な場所で開催されてきた。しかし、それらは平月の土日がメインで、日帰りが前提の活動である。

そんな中、発災以降初めてのお正月、あるいは冬休みという、またここでどんな現象が起きるか、未知なる時間を迎えることとなった。そこで、泊まり込みで、子どもたちだけでずーっと遊べる宿泊型プレーパークであれば、これまでの経緯を共有している保護者や関係者の理解と賛同が得られるのではないかと、という推測のもと、宿泊施設「ココの森」を活用したプレーパークを実施した。

基本はノンプログラムである。子どもたちは、ずーっと外にいて、そこにあるものを使ってやりたいことをやりたいだけやる、ということをやりたいだけやる、そこに食事づくりを加えたり、時間をかけて、ある程度の技術を習得しないとたどり着けない遊び「ナイフワーク、五寸釘ナイフづくり」などを提供し、日帰りではやりきれない濃度を組み込んでみた。そこに、FKアドバンスに参加しているふくしまキッズOB/OGが子どもたちと遊びや生活面を共にするカウ

ンセラー的役割として加わり、元ふくしまキッズのボランティアとして関わっていた若者が現場総括責任者としてその技能を発揮する、という体制は、非常に有効であったと思われる。

この時期になると、もちろん「地震の後片付けや仕事が大変だから、子どもを預けて仕事に集中したい」という保護者ニーズもあつたように見受けられるが、良いか悪いかは別として、被害にあつた方も着うででない方も、それなりに落ち着きと冷静さを取り戻しており、単なる災害支援の一部分、というよりも、子どもにとって自然体験、あるいは宿泊を通じた生活体験が必要であるから、というのが、保護者としての参加理由であつたように感じている。であるだけに、せつかく醸成されたその思いや共感を継続発展させていくための方法や場の提供をどう構築していくか、ということが重要になってくると考えている。



繋がった人 鐘ヶ江 歩さん (安平町在住)

隣町だけで余震の続く場所ではなく地震の影響の少ないところで子どもたちに安心して遊ばしてあげたいという気持ちと、親子離ればなれの時に災害が起こった場合への不安がありました。

次男坊はナイフを使つての活動だつたけれどあまり使わなかつたと言っていました。お箸を作るなど宿泊ゆえに「生活に欠かせないものを作つたらおもしろそう!!」と、活動を楽しくしていました。

震災後、余震の続く中、避難所での共同生活が続く、子どもが遊ぶ場所がなく、連れて出ることがままならない状況でしたので、厚真町での活動を知っていたので、近くで子どもが遊べる環境があれば良いのになと思います。

普段から自然活動に参加することが多い息子たちですが、震災後初めての活動で特に長男は地震直後の避難所で心ない言葉をかけられ恐怖を吐き出せなかつた分、1日中「やっつてもいい」環境の中で焚き火に癒された様です。周りの人の暖かい空気が心をはぐしてくれたように思います。そして私もいぶり自然学校の人たちだから安心して送り出せたのだと思います。大きな地震を体験したから、「またどこで地震が起こるかもしれない。知らない土地で起こるのでは」と恐怖で出られない日が続きました。1年たった今も少しの揺れ(車が通つた揺れ)でも胆振東部地震の恐怖を思い出します。外で遊ぶきっかけをありがとうございます。

冬・春

ヒトハキャンプから見えてきたもの

そこで、当初展開していた現地でのプレーパークにおいて「もつと遊びたかつた」「ずっと泊まってあそびたかつた」という子どもたちのつぶやきをヒントにして、ぼくたちが現地に赴くのではなく、親元から子ども達を離し、子ども達だけで泊まり込みながらずーっと遊び続けることができる場と機会、つまり「お泊りプレーパーク」というコンセプトを導き出した。ハッピースターランドで人気であった焚き火プログラムを真ん中に据えつつ、泊まり込みじゃないとできない、じっくりと取り組まないと楽しい活動……「刃物の技術習得」を重ねた活動として「ヒトハキャンプ」というコンテンツが出来上がった。

特に、親元を離れた活動については、福島原発の問題を受けて展開したふくしまキッズにおいて十分な経験と実績、そして効果が立証されているだけに、それを求める保護者は少なからずいるであろう、と予想はできたし、実際、キャンセル待ちが出るほどの申し込み状況となった。

特に、冬休みや春休みに働かずに休めばならない保護者、あるいは仕事として地震の後始末に追われている保護者にとっては、子どもの学びや育ちの場の提供と、社会人としての仕事というふたつの側面からも「必

要な活動だつたようだ。

受け入れ体制としては、東胆振地区にありながら地震の被害がなかつたイコ口の森の学校「ココの森」を活用し、2泊3日のノンプログラムスタイルを進められるよう、元ふくしまキッズ参加者の中高生がカウンセラーとなり、そのふくしまキッズボランティアとして活動していた若者がディレクターとなつて活動を展開した。かつて似たような場面であつたふくしまキッズ参加者にとっては、まさにこの時こそ恩返しにチャンスである、と、寒い北海道での活動であるにもかかわらず細やかな動きを展開し、参加した子どもたちを大いに促進してくれた。

また「ナイフ」というツールをひとつ入れることは、我々スタッフにとつても大きなチャレンジではあつたが、その存在のせいで、意味の持たせ方を丁寧にする、ということによって、危ないどころかむしろ創造的なシーンを生み、まさにプレーパークが得意とする「自分の責任で自由に遊ぶ」を広げるツールとなり得たことは大きな成果である。これは、これまで我々のような団体がやってきた宿泊型プログラムのあり方を大きく変容させる力強い経験であり、今後の宿泊型活動におおきな影響をもたらすと考えている。



災害があり、本当であれば家族がなるべく離れない安全な状況を作るべきである、という考えが主流となるなかで、あえて子ども達だけを預かる、という方法は、預かる側も預ける側もおおきなチャレンジであるが、万全の体制を整えられればむしろそのチャレンジは想像以上に重複的な効果を生み出すことを証明することができた。このことは、当法人として「今までやってきたことは間違いない」と自信をもつことができた大きなきっかけとなつたことは間違いない。この経験を生かし、単なる子どもの支援にとらわれない活動のあり方、準備のあり方を整えていきたいと考えている。

支援という経験を活かす



北進の森 製材作業

実はやらなかったほうが…

実は、今回の一連の支援活動は「やらなかった方が良かったのではないかな」と思う時がある。その時は、決して押し付けにならないように細心の注意を払い、その場に望まれた活動を望まれたようにやっていたと思っていたし、通ずべき筋を確実に通してよくある「勝手にやっている」ことがないよう、重ねて言うが、細心の注意を払ってやってきたつもりである。そして、支援に関わってくれるボランティア、あるいはプロボノと呼ばれる方々にも、気持ちよく活動に集中できるように「ドトモ」カネ情報を集め、なるべく早くに活動報告ができるような体制を

整えていたつもりであり、そしてそこで展開された各種活動は確実に一定の効果や成果を獲得し、目的を達成した。それらは、阪神・淡路大震災以降、僕個人としても何度か関わるようになった震災支援の経験や、NPOの諸先輩たちが残してきた実績を元に、決して主観的なことはなく、公明正大な活動、あるいは支援が支援で終わらないような活動となるよう、考えに考え抜いて、留意をしながら進めてきたと思っている。

しかし、どうやらそれは僕の一方的な評価、「つもり」であって、実際は、どうも僕らの意図とは違っていた。受け止められ方をしている場面が

方が自律的に取り組むであつた、という判断をし、改めてどのようなお困りごとがあるのかを再確認し、それが当方の持つノウハウや専門性、体力と合致したことをやる、と活動を絞ることにした。その結果、はやきた子ども園「北進の森」の地滑り斜面における植樹に向けた整備作業に人手やノウハウが回らないので手伝って欲しいというオファーがあり、これは当方がかねてから実施してきた活動とも親和性が高い、ということもある。今年度からはそこに資源を集中させることとなった。そのため必要なドトモカネ情報を収集し、役割を整理し、目標を設定して作業に当たるだけでなく、専門家による情報提供、馬による倒木の撤出など、特殊な活動を取り入れつつも、それが単なるコンサルや技能提供に終わることがないよう、作業馬の調達や地域に埋もれている馬

道具を使いこなす技術

次に、一連の活動を通して購入した物品については、キャッシュフローの都合上いざ自然学校の所有となつているが、ここまで関わり、つながりを持った人々との共有物であるという認識を持ち、共有品として取り扱っていきたくて考えている。これらの物品、簡単に使えるものはいくつとして、



オフグリッド型・太陽光パネルによる発電システムの組み付けを練習。これまで活動を展開してきたSVCの活動を振り返り、今後の有事に生かしていくために、今回集まった物品の管理や運用を進めた。普段からそれらを使うことで我々の技術を高め、情報を集めている。

日々の暮らしで技術を高める
最後に、いざ自然学校のあり方そのものも、少しずつ変容させていくことで、より有事に強い団体として存在していきたいと考えている。今まではどちらかというとアウトドアアクティビティ提供型、というか、イベント型の活動

が多かった。それは、少しでも自然の中に多くの人々を誘う、という点においては有効であるが、どうしても上滑り感が強いというか、必然性に欠けるといふか、社会や自然環境に対して十分な責任を果たしていない気がしていた。

しかし、今回の地震を経験し、多少なりとも被災という括りの中に入った者として、単なるアクティビティ提供団体ではたどりに着けないノウハウがあると感じた。もうひとりの暮らしに着目し、暮らしの中により自然環境を構築する、そのために、作業馬を責任持つて飼育できる環境を整える、そしてその馬の飼育に必要な餌、馬糞の利活用体制をしっかりと作る、という、有事の際も慌てない暮らしを確立した上で、の有事の際の支援活動の提供である、という感じだ。

このように、うまくいったかどうかは別として、とにかくその時必要であると判断して取り組んだ活動、あるいはそこで得られたノウハウや貴重な資金を活用して用意した物品は、決して一団体の財産として私有化するのではなく、常にオープンな状態とし、普段の活動ではそれらを楽しく使いこなす、そしていざという時には普段の暮らしや生活で培ったノウハウがすぐに支援に活かせるような準備をしておく、そんなスタンスを大切にしていきたいと思う。

NPO法人いざ自然学校

代表 上田融

になるのかもしれない。当方スタッフは、綿密な口ジックを立て、細心の注意を払って、持てる体力、そして限界を超えた状況でやれることを精一杯取り組んでくれたし、それに対しては本当に感謝している、という感謝しつづけないな、と思っている。一方で、それが全ての人に快くは届かなかった、という現状に対しては、その活動を決断した者として責任を強く感じ、想いが行き届かなかった配慮のなさを猛省しているところである。それが、活動開始から約1年経った後の、率直な感想である。

しかし、これまで展開してきた活動はその裏に過剰な心遣いともかく、全てひとつひとつ確認をし、地域関係者と密接な「ボワレンソウ」を繰り返した中で、「必要である」「手伝って欲しい」という依頼があつて初めて実施された活動である、ということは間違いない事実であり、そこは誰に言っても言わねばならない、とをこの紙面を持って報告したい。その前提に立つて、この一連の活動から見えてきた、今後いざ自然学校はこうしていく、という方針をいくつか示していきたいと思う。

森林整備とレスキュー

まずは、広範囲かつスクランブル的な被災地支援、という活動はすでに各地の行政あるいは地域の

が多かった。それは、少しでも自然の中に多くの人々を誘う、という点においては有効であるが、どうしても上滑り感が強いというか、必然性に欠けるといふか、社会や自然環境に対して十分な責任を果たしていない気がしていた。

「ふくしまキッズ発、全国への恩返しプロジェクト」そんなことを構想しています。毎年、全国どこかで何からの災害が起こる事象が続いています。私自身も、まさか自分の故郷で大きな災害が起こるなんて思いもしていませんでした。

今回のアドバンスプログラムに参加した中高生は、かつてお世話になった北海道の皆様が困っている時にタイムリーに恩返しをすることができた。一回り成長して福島に帰りました。帰りのフライトで中学生が言っていました、「今までは何かしてもらったことが嬉しかったけど、北海道に行つて何か人の役に立つことを行つたことの方がもっと嬉しいと分かった。」



一緒に働いた人 鈴木 菜津美さん (東京都在住)

実は私は苦小牧の出身なのですが、東胆振東部地震の被災時は仕事で福島県いわき市に滞在中でした。福島県はかつて自分が震災支援を行なっていた場所、復興支援を通じて多くの顔見知りがある場所。その場所に滞在している日に、今度は自分の地元で大きな震災が起きるなんて全く想像もしていませんでした。その後数日間の間に、ふくしまキッズを始め、多くの福島県の方々が「北海道のことを心配している」という熱い気持ちに触れたのがこの活動に関わろうと思った本当に最初のきっかけでした。福島と北海道、何かつなげる活動を作り出そう。福島の方々の心配しているよ、応援しているよ、という気持ちをわかりやすい形で北海道に届けよう。

今回の活動は「週末型」と「滞在型」に二分され、特に「週末型」は毎週のように活動を行いました。1泊2日、福島から東胆振へ移動する、実際の滞在時間は24時間を切るほどでしたので、参加したOBOGによると活動できる時間に限りがあることが残りを生んだ点については惜しいと感じた感が否めません。その満たされない感が滞在型への参加モチベーションに繋がったという側面も否めず意味が。

報道資料など

イベント手伝い、幼児と交流

胆振東部地震で 奉仕活動申し出 福島県の小学～大学生8人

胆振東部地震で被災した人、法人いぶり自然学校（事務局）に、保養の場を提供する。ボランティア活動の申し出。東日（苫小牧）主催の自然体験イベント（23、25日）のスタッフ（実行委員会主催）の一環で、道内小中高生ら8人が23日、むかとして立候補。寒さに負けず、わが町を訪れ、ボランティア活動元気づけ活動に励んでいた。ボランティア活動をスタートさせた。同震災後、道内で保養した学生たちで、お世話になった北海道に力尽きた後、屋外に出て遊ぶようになった同県の子らも。

訪れたのは、福島第一原子力発電所事故後、屋外に出て遊ぶようになった同県の子らも。活動場所は、法人いぶり自然学校がむか町種別地区で展開する「プレーパーク」。

23日、町入りした一行は一面の雪景色に「福島と全然違う」と口々に。想像を上回る寒さに少し戸惑いながらも、親子一緒にプレーパークを訪れた幼児らの遊び相手をし、雪合戦をしたり、大きな風呂敷を広げて子どもをふわりと包んで

胆振東部地震被害 むかわで ボランティア計画

福島県の小学～大学生8人

今度は助ける番だ

東日本大震災後の保養事業で来町

NPO団体行事をサポート

ボランティア活動は、むか町が後援。札幌市内のNPO法人「ふくしまキッズ」が、むか町でボランティア活動の計画している。東日本大震災後、同県の子どもたちを対象に行われた保養事業「ふくしまキッズ」(実行委員会主催)で、むか町を訪れた児童、生徒たちで、NPO法人いぶり自然学校(事務局)が主催する自然体験イベントに、スタッフとして参加。「お世話になった人たちの感謝になれば」と意気込んでいます。

胆振東部地震で被災した人、法人いぶり自然学校（事務局）に、保養の場を提供する。ボランティア活動の申し出。東日（苫小牧）主催の自然体験イベント（23、25日）のスタッフ（実行委員会主催）の一環で、道内小中高生ら8人が23日、むかとして立候補。寒さに負けず、わが町を訪れ、ボランティア活動元気づけ活動に励んでいた。ボランティア活動をスタートさせた。同震災後、道内で保養した学生たちで、お世話になった北海道に力尽きた後、屋外に出て遊ぶようになった同県の子らも。



応援メッセージを書き込んだ横断幕を作る福島の子どもら＝10月28日、福島県郡山市（提供）

いぶり自然学校に道が感謝状

胆振東部地震後、子どもの心身ケア



道からの感謝状を受け取る上田代表（右）

昨年9月の胆振東部地震で、大きな被害を受けた厚真町など、自由の伸び伸びる道。いぶり自然学校に感謝状を贈った。道は、胆振東部地震後、子どもの心身ケアに貢献したとして、厚真町のNPO法人いぶり自然学校（上田代表）に感謝状を贈った。道は、胆振東部地震後、子どもの心身ケアに貢献したとして、厚真町のNPO法人いぶり自然学校（上田代表）に感謝状を贈った。道は、胆振東部地震後、子どもの心身ケアに貢献したとして、厚真町のNPO法人いぶり自然学校（上田代表）に感謝状を贈った。

「何かを返したい」「復興の役に立てないか」。東日本大震災から3年が経ち、日本大震災がもたらした時に、新しいひとときを提供しようとした。胆振東部地震後、子どもの心身ケアに貢献したとして、厚真町のNPO法人いぶり自然学校（上田代表）に感謝状を贈った。道は、胆振東部地震後、子どもの心身ケアに貢献したとして、厚真町のNPO法人いぶり自然学校（上田代表）に感謝状を贈った。

苫小牧民報2019年4月13日



道からの感謝状を受け取る上田代表（右）

苫小牧民報2018年11月20日

うえだんへ

今回は、姉がお世話になります。私は今、小学五年生になりました。もう、かけ算わり算もできるし、一輪車にも乗れます。今回は、予定があわなくて、気持ちだけ参加させていただきます。お体、お気をつけてください！



プレーパークを訪れた幼児と遊ぶ福島県の学生（手前右）ら

苫小牧民報2018年11月24日

感謝状

特定非常活動法人 いぶり自然学校 様

貴校は平成三十年北海道胆振東部地震により被災した安平町の被災者に対し、善い心で子どもに安心・安全な避難生活を築くための手助けなど多大なる貢献をされました。よってそのご厚意に対して安平町民を代表して心より感謝の意を表します。ここにそのご厚意を称え感謝状を贈ります。子どもに一日も早い安平町の復興・復興をお祈りいたします。

令和元年九月六日

安平町長 及川 春一 郎

感謝状

特定非常活動法人 いぶり自然学校 様

この度の北海道胆振東部地震に際し、本町の復興活動に多大なるご支援を賜りました。ここにその功績を讃え感謝の意を表します。

平成三十年十二月

社会福祉法人 安平町社会福祉協議会 会長 荒木 徹

いぶり自然学校募金 収支報告(2018.9.10-2019.4.15)

■収入の部 合計15,037,500円

	募金	助成金	その他	合計
一般募金	¥4,628,500			¥4,628,500
シビックフォース		¥1,000,000		¥1,000,000
FKアドバンス		¥7,518,000		¥7,518,000
赤い羽根共同募金		¥1,790,000		¥1,790,000
北海道NPOサポセン		¥100,000		¥100,000
その他			¥1,000	¥1,000
小計	¥4,628,500	¥10,408,000	¥1,000	¥15,037,500

■支出の部 合計12,435,777円

	消耗品	旅費交通費	賃借料	諸謝金	印刷製本	支払い手数料	合計
一般募金	¥1,782,298	¥720,023	¥2,000,000	¥40,577	¥12,270	¥25,596	¥4,580,764
シビックフォース		¥150,000	¥479,120	¥75,880	¥0	¥0	¥705,000
FKアドバンス	¥134,491	¥1,676,966	¥600,000	¥2,268,398	¥39,459	¥0	¥4,719,314
赤い羽根共同募金	¥347,509	¥0	¥400,000	¥1,582,000	¥0	¥0	¥2,329,509
北海道NPOサポセン	¥74,659	¥0	¥0	¥0	¥26,531	¥0	¥101,190
小計	¥2,338,957	¥2,546,989	¥3,479,120	¥3,966,855	¥78,260	¥25,596	¥12,435,777

* 皆様からお預かりしている募金の残金(2,601,723円)については、北進の森における植樹・育樹及び道具の保守のために使われております。詳しい活動内容についてはQRコードへアクセス願います。



いぶり自然学校・子どものため災害支援(東胆振svc)